

鼻腔内に過剰歯の萌出を認めた一例

○眞田知基, 大隈由紀子*, 小笠原貴子, 西垣奏一郎*, 山座治義*, 増田啓次, 柳田憲一, 野中和明*

九大病院・小児歯・スペシャルニーズ歯科,
九大・院・小児歯*

【緒言】過剰歯は発現頻度が0.2%程度で、上顎前歯部が好発部位の大半を占めている。鼻腔内から萌出した過剰歯に遭遇することは非常に稀であり、これまで耳鼻科からの報告が主であり歯科からの報告は少ない。今回、我々は右側鼻腔内に萌出した過剰歯の症例を経験したので報告する。

【症例】患児：6歳8か月男児 主訴：鼻腔内異物の精査・加療依頼 現病歴：1か月前より副鼻腔炎の症状悪化のため近耳鼻咽喉科を受診したところ、内視鏡検査にて右側鼻腔内に歯牙様硬組織を指摘された。同部の精査・加療依頼で、紹介により当科受診に至った。現症：（鼻腔内所見）右側鼻腔内は、血餅・鼻汁で満たされ、視診では歯牙様構造物を確認できない。（口腔内所見）Hellman Dental Stage II A。乳歯の早期脱落や欠損は認めない。

（エックス線所見）パノラマエックス線写真にて右側鼻腔内に硬組織様の不透過像を認める。乳歯および永久歯歯胚数に過不足を認めない。《CT所見》右鼻下道付近より正中矢状面の前方に向かって歯牙様硬組織の存在を認める。歯冠先端部は上顎骨の最前方部と同等の位置に存在している。（処置・経過）当院耳鼻咽喉科と対応を相談の上で、歯牙様硬組織を全身麻酔下にて摘出を行った。で連続した棚状軟組織を認め茎部にて切除し、歯牙様硬組織と一塊として摘出した。術後経過は良好で翌日退院となった。

【考察】本症例は、鼻腔内過剰歯により自覚症状を訴えた為、耳鼻科での内視鏡検査にて異所性過剰歯を早期発見できた。摘出した過剰歯は根未完成・乳犬歯様形態であり、乳歯性過剰歯と考えられる。本症例ではCT撮影により過剰歯の形態と位置を3次元的に正確に把握し、医科との連携により迅速に対処できた。

顔面脂肪腫により顎骨の変形をきたした一例

○宮崎晶子**, 柳田憲一**, 大隈由紀子*, 小笠原貴子**, 西垣奏一郎*, 山座治義*, 増田啓次**, 野中和明*

（九大・院・小児歯*, 九大病院・小児歯・スペシャルニーズ歯**）

【緒言】

脂肪症とは成熟した脂肪細胞からなる良性非歯原性腫瘍であり、全身のあらゆる部位（体幹、四肢、頭頸部、腹部、腸管等）に発生するにも関わらず、口腔領域では比較的稀である。発育は緩慢で無症状のため、経過は長期に及ぶ。口腔内所見として患側顎骨の肥大、患側歯の先天性欠如、乳歯早期脱落、永久歯早期萌出、歯根奇形などが報告されている。また本疾患による口腔機能不全、言語障害、睡眠障害、心理的負担も挙げられる。我々は顔面脂肪腫症と診断され、顎骨の肥大を伴う症例に遭遇し、若干の知見を得たので報告する。

【症例】

患児：生後10か月の女児。主訴：本院小児外科より口腔内および下顎骨肥大の精査依頼。現病歴：出生時より右側頬部に瀰漫性の腫大を認めたがその他に外奇形はない。本院小児外科にてフォロー中。現症：A+A萌出 右側頬部の瀰漫性腫大。右側下顎舌側膨隆。骨様の硬さ。右側下顎頬側膨隆。右側上顎口蓋膨隆。摂食・嚥下は異常なし CT所見：右顔面に脂肪腫瘍を認める。同部位の顔面の筋や耳下腺・口唇・下眼瞼にも脂肪の浸潤を認める。近傍の骨には肥厚・変形を認める。MRI所見：右側頬皮下～咀嚼筋間隙、傍咽頭間隙、右耳下腺に脂肪組織増生、多くは瀰漫性、気道閉塞所見ない。経過：患児は生後10か月と乳幼児であるため、早急の腫瘍切除は行わず、経過観察中。口腔内に関しては、当科にて管理中。

【考察】

本症例の場合、成長に伴って更なる顎骨の変形が出てくる可能性がある。また顎骨変形により齶蝕多発傾向、咬合異常の可能性も考えられるので今後も注意深く定期管理を継続していく予定である。